

究極のプリマドンナオペラ《ノルマ》を、 究極のプリマドンナ、グルベローヴァで聴く

ヴィンチェンツォ・ベッリーニの《ノルマ》は、オペラ史上に輝く傑作のひとつである。歌手の声や技術の披露を目的に作曲されたオペラから、物語や人物に寄り添うドラマティックなオペラへの境目に、《ノルマ》は凜と佇んでいる。有名なアリア〈清らかな女神〉を歌うノルマを照らす、銀色の光のように。

ノルマは巫女、つまり神聖な存在だ。なのに敵国の将軍と禁断の恋に落ち、子供までもうけてしまう。そこまで犠牲を払ったのに、恋人は別の女性と恋に落ちていた。女として母として、怒り、嘆き、苦しむノルマの心を、ベッリーニの音楽はあくまで美しく、繊細に描き出す。ノルマが自らの罪を告白し、彼女の真の愛に気づいた恋人とともに火刑台へと向かう幕切れは、悲劇を忘れるほど神々しい。

初演の時ノルマ役を歌ったジュディッタ・バスタという名歌手は、役柄にのめりこむあまり「ノルマかバスタか区別がつかない」と絶賛された。以来ノルマ役は、数少ない究極のプリマドンナ役として、時代を代表するディーヴァたちを魅了してきた。とりわけ19世紀前半の、歌手優先のオペラを得意とする歌手にとって、ノルマは集大成というべき大役だ。

現代最高のプリマドンナのひとりであるエディタ・グルベローヴァは、60代も後半を迎えた現在、キャリアの到達点としてノルマ役に取り組んでいる。技術の面でも、声の色合いや表現力においても、かつてない高みに達している彼女のノルマが日本で聴けるのは奇跡というほかない。どうあっても見逃せない、聴き逃さない公演である。

Story

● ベッリーニ

「ノルマ」あらすじ

【主な登場人物】

ノルマ：ドルイド教の巫女長。敵将ポリオーネとの間に2人の息子がいる。
ポリオーネ：ローマの将軍。ノルマを捨て、若き巫女アダルジーザに求愛する。
アダルジーザ：巫女。敵将ポリオーネとの恋仲に悩む。
オロヴェーゾ：ドルイド教の指導者。ノルマの父。ローマ軍に敵対。

【場面】

時は紀元前50年ごろ。
場所はローマ帝国支配下にあるガリア地方。

第1幕

ガリア地方のドルイド族はローマの支配下にある。この日も、ドルイド族のオロヴェーゾを指導者とする部族は、ローマからの独立を求め、解放の祈りを捧げている。彼らにとってローマは侵略者なのだ。

そのローマの将軍ポリオーネは、ここガリア地方を統治する総督であるが、ドルイド族の巫女長ノルマとの間に2人の息子を密かにもうけていた。独立を求めるドルイド族の巫女長が敵国ローマの将軍と恋仲だとは誰も知らない秘密である。しかし、ポリオーネのノルマへの愛は完全に冷め、今は若き巫女アダルジーザに想いを寄せているのだ。

一方ノルマは、ドルイド族に率いられ、巫女長として儀式を遂行している。独立を願い荒ぶる群衆をなだめ、アリア「清らかな女神よ」を歌い月の女神に祈る。この時のノルマの心情は、同胞達への忠誠を誓いながらも、ローマの統治者ポリオーネとの背徳の愛に苦しんでいた。

同じく背徳の愛に苦しむ巫女がいた。名はアダルジーザ。ポリオーネからの執拗な求愛を拒み切れず、一緒にローマに逃げる約束をしてしまった。ドルイド族を裏切ることになるアダルジーザは悩み、あるうにか巫女長ノルマへ相談をするため住居を訪れる。もちろん、ノルマとポリオーネの関係など彼女は知らない。同じような背徳心に悩めるアダルジーザの告白に、ノルマは自分の身を重ね同情をし、過ちを許し慰める。ところがそこにポリオーネが現れ、2人の巫女は全てを理解し、修羅場が形成。ノルマは激昂するのであった。

第2幕

絶望のノルマは、2人の息子とともに死のうとするが、我が子の寝顔を見るうちに泣き伏せてしまう。出来るわけがない。ノルマはアダルジーザを呼び寄せ、彼女に子どもたちを託したい、自分は贖罪のため死にたいと告げる。アダルジーザは驚き、それならば自分がポリオーネと別れるので、ノルマには素晴らしい母親として生きてほしいと説得をして、2人の友情を生むのであった。

しかし、ポリオーネはアダルジーザの提案を拒絶。怒りに我を忘れたノルマは、祭壇の銅鑼を打ち鳴らしドルイド族にローマとの戦争開始の宣言をする。銅鑼の音に湧く血気盛んな群衆により、アダルジーザを連れ出そうとしたポリオーネが早速捕われる。

ノルマは処刑を叫ぶ群衆や父を一旦追いやり、ポリオーネと二人きりになる機会を作る。そこで「アダルジーザを諦め自分の元に戻るならば助ける」と情けをかけるのだが、それでもポリオーネは頑なに拒否をする。ノルマは再び皆を呼び集め、裏切り者の巫女を処刑せよと告げる。一同、その巫女の名を待っていると、ノルマは自分こそが裏切り者だと告白するのであった。これまでのいさざつを話し、自分こそが背徳者であると。

ポリオーネはあまりにも高潔なノルマに衝撃を受け、彼女への深い愛が目覚める。時すでに遅いが、彼女へ今までの許しを述べる。ノルマは父オロヴェーゾに子どもたちのことを懇願すると、ポリオーネと共に火刑台の業火に身を投げるのであった。

NORMA ノルマ

全2幕 原語上演・日本語字幕付き

EDITA GRUBEROVA

エディタ・グルベローヴァ

衰え知らずの完璧な声で聴ける
グルベローヴァの神々しいノルマ

香原 斗志 (オペラ評論家)

華麗なコロラトゥーラ、声の色彩と陰影。一分の隙もないテクニックを用いて、グルベローヴァは旋律を変幻自在に色づけ、作曲家も驚くに違いないほど完璧な歌を披露する。「する」と記したのは、現在形だからだ。昨年、ミラノ・スカラ座でのリサイタルでは、衰えないばかりか深みを増した声が満場の大喝采を浴びた。神聖で、女らしく、激しいノルマという超難役を歌うに際し、グルベローヴァの「年輪」は、むしろ武器になるだろう。

○ グルベローヴァ 最近の出演公演 ○

2014年		
10月	ウィーン国立歌劇場	「ロベルト・デヴリュー」
12月	ベルリン・ドイツ・オペラ	「ロベルト・デヴリュー」
2015年		
1月	ウィーン国立歌劇場	「異国女」
2月	ウィーン国立歌劇場	グルベローヴァ 45周年コンサート
4月	バイエルン国立歌劇場	「ロベルト・デヴリュー」
6月	ベルリン・ドイツ・オペラ	「異国女」
7月	ミラノ・スカラ座	コンサート
10月	ウィーン国立歌劇場	「アンナ・ボレーナ」
2016年		
4月	バイエルン国立歌劇場	「ルクレツィア・ボルジア」
5月	ベルリン・ドイツ・オペラ	「ノルマ」

ポリオーネ (テノール)



ゾラン・トドロヴィッチ

ロイヤル・オペラ・ハウス、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場など名だたる歌劇場に出演。ノルマ、ロベルト・デヴリュー、ラ・ボエームなどエディタ・グルベローヴァとの共演多数。

演出



菅尾 友

蜷川幸雄、野田秀樹、宮本亜門などの助手を経て、現在ベルリンで活躍する演出家。2015年11月の日生劇場「ドン・ジョバンニ」が話題となる。文芸春秋「10年後の日本を担う逸材108人」に選出された。

アダルジーザ (メゾ・ソプラノ)



ズザナ・スヴェータ

ブラチスラヴァ・パフォーミング・アーツにて声楽を学ぶ。2006年「コシ・ファン・トゥッテ」ドラヘラ役でモラヴィア国立劇場でデビュー。グルベローヴァの教えをうけ、その実力は彼女から太鼓判を得ている。

指揮



ペーター・ヴァレントヴィッチ

2012年ウィーン国立歌劇場のヤナー・チェク作品の新演出の責任者を務める。ウィーンでグルベローヴァが出演するガラ・コンサート、ベルリンの「ノルマ」を指揮。グルベローヴァの信頼を得ている。

